

原 明美(音楽評論家) Akemi Hara

19世紀、音楽史上のロマン派の時代には、演奏技巧と表現力の両面で、ピアノの可能性がいっそう高まった。また、今日では、作曲家と演奏家が、いわば分業だが、当時の音楽家たちは、作曲した曲を自分で演奏した。優れたピアニストは、ピアノのための名曲も残したのである。フレデリック・ショパン(1810～49)は、その代表的な一人であり、同世代のフランツ・リストと共に、名ピアニストとして各地で人気を博した。

ポーランドのワルシャワ近郊ジェラゾヴァ・ヴォラに生まれ、39年間の生涯の後半を主にフランスで送り、故国に帰ることなく世を去ったショパンにとって、ピアノという楽器は最も重要な表現手段であり、書き残した作品の大半はピアノ曲だった。今回ヤブウォンスキが披露するオール・ショパン・プログラムには、6つのジャンルからの11曲が選ばれているが、その構成においては、調の推移の美しさも注目される。

フレデリック・ショパン

ポロネーズ 第7番 変イ長調 Op.61「幻想ポロネーズ」

ショパンは、ポーランドの舞曲ポロネーズを、芸術作品としての価値を持つものに高めた。晩年の傑作「幻想ポロネーズ」は、その最も成熟した例と言えよう。1845～46年に作曲されたこの曲のなかで、ポロネーズの持つ本来の舞踏的な性格は、拍子やリズムの一部に残っているが、全体は自由な形式で書かれている。神秘的な雰囲気を感じた序奏が始まった後、主要な楽想がいくつか現れ、斬新な転調などを交えて展開する。そして最後は、いったん静寂に包まれた後に主和音が力強く鳴り響いて、劇的に曲の終わりを告げる。

ノクターン 第13番 ハ短調 Op.48-1

ショパンは、アイルランド出身のJ.フィールドが創始したというノクターン(夜想曲)の様式に基づいて、21曲ほどのノクターンを作曲した。1841年に作曲されたOp.48-1は、レント、ハ短調により、激しい曲想を持ち、堂々たる威容を印象づけるノクターンである。

12のエチュード Op.10 第12番 ハ短調「革命」

ショパンのエチュード(練習曲)は、Op.10に12曲、Op.25に12曲、作品番号のない3曲の、全部で27曲が残されている。1833年に出版され、F.リストに献呈されたOp.10(全12曲)のなかの第12番は、「革命」の名で広く知られる。ショパンがウィーンからパリへ向かう途上、立ち寄ったシュトゥットガルトで、故郷のワルシャワがロシア軍の侵入を受けて陥落したことを知り、絶望と怒りをこめて書いた、というエピソードが伝えられている。激しい曲想を持つこの曲が「革命のエチュード」と呼ばれているのも、そのエピソードによるものだろう。

幻想曲 ヘ短調 Op.49

1841年に作曲された、ショパンの唯一の「幻想曲」。行進曲風の序奏が始まった後、幻想曲=ファンタジーの名のとおり、多彩な楽想が、自由で幻想的な展開を見せるが、全体はソナタ形式風の構成でまとめられ、見事な統一感を印象づける。そして最後は、変イ長調のコーダによって華やかに締めくくられる。

バラード 第4番 ヘ短調 Op.52

元来「物語詩」を意味する「バラード」は、音楽では歌曲の分野で用いられていたが、初めて器楽曲に採用した作曲家は、ショパンだったとされる。彼の残した4曲のバラードは、文学のバラードの持つ物語としての

特色をふまえたうえで、音楽作品として様式化されているが、同じポーランド出身の詩人A.ミツキエヴィチの叙事詩にヒントを得て作曲された、とも考えられている。1842～43年に作曲されたバラード第4番は、ソナタ形式に変奏曲とロンドの要素が加わったとみられる自由な形式で書かれている。二つの主題が変奏されてゆくクライマックスから、コーダに至るドラマティックな場面は、特に演奏効果が高い。

ノクターン 第20番 嬰ハ短調(遺作)

この遺作のノクターンは、ショパンの死後、「アダージョ」の題で1875年に初めて出版されたが、版を重ねるうちに「思い出」「ノクターン」と変更された。これは、自筆譜にテンポ表示(レント・コン・グラン・エスプレッシオーネ)しか記されておらず、しかも複数の自筆譜や筆写譜が存在するためである。このうち一つの自筆譜が、ショパンの姉ルドヴィカに献呈されており、彼女の記録に、「1830年にウィーンからレントの曲が送られてきた。ノクターンの類のレントであった」とあることから、1830年の作と推定されている。ロマンティックで感傷的なメロディーが歌われるこの曲は、近年では、映画「戦場のピアニスト」(2002年、ポーランド&フランス)に用いられて、広く知られるようになった。

ワルツ 第7番 嬰ハ短調 Op.64-2

ショパンは、20曲ほどのワルツを残した。1846～47年に作曲された第7番は、哀愁を帯びた曲想を持つワルツだが、ポーランドの舞曲マズルカのリズムも用いられている。

ノクターン 第17番 ロ長調 Op.62-1

ノクターン 第18番 ホ長調 Op.62-2

ショパンのノクターンは、短い生涯のさまざまな時期に作曲されたが、Op.62としてある2曲は最後のノクターンであり、1846年に作曲され、彼の存命中、最後に出版された。

Op.62-1(アンダンテ、ロ長調)については、晩年のショパンらしい精妙なタッチと共に、高雅な気品を湛えた美しいメロディーが印象的である。Op.62-2(レント、ホ長調)は、簡潔な曲想に始まるが、洗練された和声配置や、中間部での細かな動きなど、晩年のショパンの熟練した手法が注目される。

バラード 第3番 変イ長調 Op.47

1840～41年に作曲された、このバラードの構造は、コーダを伴う一種のソナタ形式と考えられる。優美な主題が、効果的な転調を交えながら展開し、4曲のバラードのなかで最も明るい作風を印象づける。

アンダンテ・スピアナートと華麗なる大ポロネーズ 変ホ長調 Op.22

この作品は元来、ピアノとオーケストラのために書かれ、ポロネーズの部分が1830～31年、序奏に当たるアンダンテ・スピアナートの部分は1834年に完成された。今日ではオーケストラ・パートを省いて、ピアノ独奏曲として演奏される機会が圧倒的に多いが、十分に華やかな演奏効果を持つ。曲は、ト長調の「アンダンテ・スピアナート」に始まる。「スピアナート」とは、「滑らかな」といった意味のイタリア語である。続く変ホ長調の「華麗なる大ポロネーズ」は、長いコーダを伴う3部形式で書かれており、ポロネーズ独特の勇壮なリズムを活かしながら、華やかな曲想が展開する。